

自己評価報告書(最終報告)

報告者

教職実践力高度化コース/
久我 直人

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

中央教育審議会の答申のキーワードは、「学び続ける教師」であり、本学の使命と重ね合わせて考えれば、自己の実践から課題を生み出し、よりよい教育の実現に向けて成長し続ける教師を育てることとらえている。その学び続ける(成長し続ける)教師を育成するために、25年度の授業実践では、授業の中で扱う理論と院生自身の教育実践(学卒院生にとっては自身の学習者としての経験)を往還させながら授業展開することを構想している。具体的には、①扱う授業内容を実践から生み出された理論を中心に扱う。特に学級経営における教師の省察力や、組織化を生み出す学校組織マネジメント理論等、教育実践に根ざした内容を中心的に扱う。また、②授業方法として、その理論と自身の経験を結びつけた省察を促す場面を設定すること、さらには、グループワーク等でその省察を複眼的なものにすることを考えている。さらに、③評価方法として、単に理論と実践を往還する省察力、学校の組織化を促す組織マネジメント力の修得に留まらず、学びをどのように実習や今後の教育活動に活かしていこうと考えているのかという活用能力まで含めた評価を行うことを構想している。

2. 点検・評価

中央教育審議会の答申のキーワードは、「学び続ける教師」(成長し続ける教師)を育成するために、25年度の授業実践では、授業の中で扱う理論と院生自身の教育実践(学卒院生にとっては自身の学習者としての経験)を往還させながら授業展開することを構想し、以下の通り実践した。

①扱う授業内容を実践から生み出された理論を中心に扱った。特に学級経営における教師の省察力や、組織化を生み出す学校組織マネジメント理論等、教育実践に根ざした内容を中心的に扱った。

②授業方法として、その理論と自身の経験を結びつけた省察を促す場面を設定した。さらには、グループワーク等でその省察を複眼的なものになるように工夫し、受講者のワークシートからもその変容が捉えられた。

③評価方法として、単に理論と実践を往還する省察力、学校の組織化を促す組織マネジメント力の修得に留まらず、学びをどのように実習や今後の教育活動に活かしていこうと考えているのかという活用方策まで記述させる振り返りシートを活用し、評価を行った。

院生からの授業評価において、授業満足度が4.9となり、全ての項目で4.8以上の評価を得た。「学校現場に戻った時、すぐにやってみようとか、考え方をベースにしてこんなことも試してみたい」というコメント等も多く寄せられ、実践への動機付け効果もとらえられた。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

教育計画として、授業実践において、上述の通り、理論と実践を往還した授業展開を通して院生の省察力の深化を促す。そのことを通して、さらに未来展望に立った次の教育実践に活かせる教師(成長し続ける)の育成を目指す。また、ゼミ生の指導においては、学校組織マネジメントの理論(教師の主体的統合モデル(久我2010))を学校現場に導入することによって、理論と実践の往還、ならびに学校改善力の育成を試みる。そのとき、学校現場の教職員との協働を生み出すことによって、院生の学びに留まらず、学校組織の改善、ならびに子どもの行動変容を生み出すことを試みる。そして、院生の成長と学校の改善を同時に具現化することを通して、本学教職大学院の存在や価値を高め、今後の教員の資質能力の総合的な向上方策のモデルを明示していきたいと考えている。また、現在教職大学院2年次生の院生担当(コラボレーションオフィスコーディネーター)として、実習や学生生活における支援を行う。

2. 点検・評価

授業実践において、上述の通り、理論と実践を往還した授業展開を通して院生の省察力の深化を促すように展開した。そのことを通して、さらに未来展望に立った次の教育実践に活かせる、学び続ける教師(成長し続ける)の育成を試みた。院生からの授業評価において、「専門性の向上」が4.9となり、全ての項目で4.8以上の評価を得た。「学校現場に戻った時、すぐにやってみようとか、考え方をベースにしてこんなことも試してみたい」というコメント等も多く寄せられ、実践への動機付け効果もとらえられた。また、ゼミ生の指導においては、学校組織マネジメントの理論(教師の主体的統合モデル(久我2010))を学校現場に導入することによって、理論と実践の往還、ならびに学校改善力の育成を試みた。そのとき、学校現場の教職員との協働を生み出すことによって、院生の学びに留まらず、学校組織の改善、ならびに子どもの行動変容を生み出すことを試み、その変容が確認された。院生の成長と学校の改善が同時に具現化したことが確認された。また、教職大学院2年次生の院生担当(コラボレーションオフィスコーディネーター)として、実習や学生生活における支援を行った。特に、体調を崩したゼミ生がおり、ゼミ指導、実習指導等において、院生の負担を軽減し、しかも実習の内実を生み出すように支援を厚くした。結果、体調を維持しながら、学校の改善を具現化することができ、院生の学びの内実と学校現場からの感謝の言葉を得た。

II-2. 研究

1. 目標・計画

これまで科学研究費を活用して、独自の「教師の主体的統合理論」をベースに学校組織マネジメントの理論を構築してきた。この理論を学校組織に導入し、教職員の組織化と効果のある取組の展開を試みてきた。その中で一定の効果が検証されてきた。今年度はさらに、複数の校種、学校規模が違う学校に導入し、理論の精緻化を図る。また、生徒の意識と行動の構造の解明を進め、その構造に基づいた生徒指導上の諸問題を解決する教育改善プログラムの構築を進める。本年度は、高知県教育委員会との連携の中でこの教育改善プログラムを研究指定校6校に導入し、その検証を行う(高知県教育委員会「夢いっぱいプロジェクト」事業の事業アドバイザー)。この実践研究について、学会で発表すると共に論文にまとめることを計画している。

2. 点検・評価

これまで構築してきた学校組織マネジメントの理論に基づく実践を科学研究費を活用して進めた。ここまで、この理論を学校組織に導入し、教職員の組織化と効果のある取組の展開を試みてきた。その中で一定の効果が検証された。また、生徒の意識と行動の構造の解明を進め、その構造に基づいた生徒指導上の諸問題を解決する教育改善プログラムの構築を進めた。本年度は、高知県教育委員会との連携の中でこの教育改善プログラムを研究指定校6校に導入し、その検証を行い、その効果が一定程度検証された(高知県教育委員会「夢いっぱいプロジェクト」事業の事業アドバイザー)。この実践研究について、学会で発表すると共に論文にまとめ、「教育実践学論集15」に掲載された。一方、本学教職大学院の現任教員実習について、日本教育大学協会研究大会において、その実践を発表し、議論を深めた。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

本年度も以下の8つの取組を中心にして、大学運営並びに本学の地域連携、社会貢献に尽力し、本学の社会的認知の向上と定員確保等に貢献することを目標とする。

- ①教員免許状更新講習実施委員会副委員長としての役割を遂行する
 - ②全国教育実践活動顕彰委員会委員としての役割を遂行する
 - ③本学教職大学院と徳島市との連携事業(学校元気アップ推進事業)への継続的な参加と直接的な学校支援を行う
 - ④本学教職大学院と三重県鈴鹿市との連携事業への継続的な参加と直接的な学校支援を行う
 - ⑤高知県教育委員会との連携事業「夢いっぱいプロジェクト」の事業アドバイザーとして、生徒指導上の諸問題を解決する直接的な学校支援を行う
 - ⑥教育支援アドバイザーとしての直接的な学校支援を行う
 - ⑦静岡における公開講座の実施する(8/19)
 - ⑧静岡県、高知県等、教育委員会事務局への積極的な訪問により連携推進、協働関係を確立する
- この他、各県・市等からの依頼に応じて、教育改善にかかる支援を行い、本学の社会的認知の向上に努める。

2. 点検・評価

本年度計画した以下の8つの取組を中心にして、大学運営並びに本学の地域連携、社会貢献に尽力し、本学の社会的認知の向上と定員確保等に貢献してきた。

- ①教員免許状更新講習実施委員会副委員長としての役割を遂行している。
 - ②全国教育実践活動顕彰委員会委員としての役割を遂行し、現在、本年度の応募者の審査をすすめている。
 - ③本学教職大学院と徳島市との連携事業(学校元気アップ推進事業)への継続的な参加と直接的な学校支援を行ってきた。
 - ④本学教職大学院と三重県鈴鹿市との連携事業への継続的な参加と直接的な学校支援を行い、2回の訪問でその成果を上げてきた。
 - ⑤高知県教育委員会との連携事業「夢いっぱいプロジェクト」の統括アドバイザーとして、生徒指導上の諸問題を解決する直接的な学校支援を行っている。
 - ⑥教育支援アドバイザーとしての直接的な学校支援を行っている。
 - ⑦静岡における公開講座の実施(8/19)し、38名の参加を得た。
 - ⑧静岡県、高知県等、教育委員会事務局への積極的な訪問により連携推進、協働関係を確立してきた。
 - ⑨高知県で支援を行った学校の教員から、次年度教職大学院への派遣申請を得ることができた。
- この他、各県・市等からの依頼に応じて、教育改善にかかる支援を行い、本学の社会的認知の向上に努めてきた。結果、静岡県からの理解を得、静岡県からの派遣定数(2)を維持することができた。さらに高知県の小学校への学校支援を通して、本学教職大学院への進学希望者を得ることができた(平成26年度派遣決定)。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

いじめや不登校等, 学校が抱える教育課題解決に積極的に支援に入り, 教育委員会, 学校現場との連携を深める。具体的には, 以下の4点を取組目標として設定している。

- ① 本学教職大学院と徳島市との連携事業(学校元気アップ推進事業)への継続的な参加と直接的な学校支援を行う
 - ② 本学教職大学院と三重県鈴鹿市との連携事業への継続的な参加と直接的な学校支援を行う
 - ③ 高知県教育委員会との連携事業「夢いっぱいプロジェクト」の事業アドバイザーとして, 生徒指導上の諸問題を解決する直接的な学校支援を行う
 - ④ 教育支援アドバイザーとしての直接的な学校支援を行う
- この他, 各県・市等からの依頼に応じて, 教育改善にかかる支援を行い, 本学の社会的認知の向上に努める。また, 以下の2点の取組を通して, 各県の教育委員会との連携を深め, 本学の教育的資源を積極的に広報するとともに互恵的な協働関係の構築を目指す。
- ⑤ 静岡における公開講座の実施する(8/19)
 - ⑥ 静岡県, 高知県等, 教育委員会事務局への積極的な訪問により連携推進, 協働関係を確立する

2. 点検・評価

いじめや不登校等, 学校が抱える教育課題解決に積極的に支援に入り, 教育委員会, 学校現場との連携を深めた。具体的には, 以下の4点を実施した。

- ① 本学教職大学院と徳島市との連携事業(学校元気アップ推進事業)において, 2校からの依頼を受け, 3回の支援を行った。
 - ② 本学教職大学院と三重県鈴鹿市との連携事業において, 大木中学校の校内研修で講演を行う等, 2回の支援を行い, 学校改善の方向性を共有した。
 - ③ 高知県教育委員会との連携事業「夢いっぱいプロジェクト」の統括アドバイザーとして, 生徒指導上の諸問題を抱える学校に支援を行い, 生徒指導困難校の改善を生み出してきた。
 - ④ 教育支援アドバイザーとして3回の依頼に応え, 校内研修, 教頭研修会で講演等を行った。
- この他, 各県・市等からの依頼に応じて, 研修会等での講演を行い, 本学の社会的認知の向上に努めた。また, 以下の2点の取組を通して, 各県の教育委員会との連携を深め, 本学の教育的資源を積極的に広報するとともに互恵的な協働関係の構築を進めた。
- ⑤ 静岡における公開講座の実施し, 38人の参加を得た(8/19)。
 - ⑥ 静岡県, 高知県等, 教育委員会事務局への積極的な訪問と具体的な実践成果の報告を行い, 静岡県では教育長並びに派遣担当者から「鳴門教育大学への派遣を継続します」という前向き意見をいただいた。結果, 平成26年度も静岡県からの派遣定数(2)を維持することができた。さらに高知県の小学校への学校支援を通して, 本学教職大学院への進学希望者を得ることができた(平成26年度派遣決定)。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

◎教育において

① 「学び続ける教師」を意図した授業を構成し, 展開した結果, 院生からの授業評価において, 授業満足度が4.9となり, 全ての項目で4.8以上の評価を得た。「学校現場に戻った時, すぐにやってみようとか, 考え方をベースにしてこんなことも試してみたい」というコメント等も多く寄せられ, 実践への動機付け効果もとらえられた。

② 院生指導においては, 体調を崩したゼミ生がおり, ゼミ指導, 実習指導等において, 院生の負担を軽減し, しかも実習の内実を生み出すように支援を厚くした。結果, 体調を維持しながら, 学校の改善を具現化することができ, 院生の学びの内実と学校現場からの感謝の言葉を得た。

◎本学の広報, 定員充足において

① 静岡県教育委員会事務局において, 訪問時に具体的な実践成果の報告を行い, 教育長並びに派遣担当者から「鳴門教育大学への派遣を継続します」という前向き意見をいただき, 結果, 平成26年度も静岡県からの派遣定数(2)を維持することができた。

② 学校経営の支援にかかわった高知県の小学校から, 「本学教職大学院で学び, 学校改善に寄与したい」と本学教職大学院への進学希望者を得ることができた(平成26年度派遣決定)。

③ 県外(静岡)において公開講座を実施し, 38名の参加者を得た。これで4年目を迎えるが, 参加者が年々増え続けており, 本学を広報する意味でも効果を感じた。

④ 高知県教育委員会とも連携事業において交流を深め, 生徒指導困難校の改善プロジェクトを駆動させ, 効果を上げつつある。

◎研究において

① 本学教職大学院の現任教実習について, 日本教育大学協会研究大会において, その実践を発表し, 本学教職大学院の実践力育成の特徴とその効果について明示し議論を深めた。

② 高知県での実践研究について, 学会で発表すると共に論文にまとめ, 「教育実践学論集15」に掲載された。